

東北に行って

縫製の仕事をしている人たちが釜石にいました。

3月11日の地震で東北地方が津波によるダメージを受けたとNEWSで知りすごく心配になっていました。前々からいつか機会を作って東北の人たちに会ってみたいと思っていたのです。縫製工場を統括する安宅さんに相談して、10月30日に会いに行くことにしました。最初に向かった伊藤さんの裁断工場がある花巻市は幸いなことに地震の影響がなかったのですが、翌日行った釜石市で目にした光景は私にとって生涯忘れられない衝撃的なものになりました。津波によって港の町は何もかもがなくなり、まるでゴーストタウンのようになっていました。釜石には私の仕事でお世話になっている縫製工場＜アトリエ恵＞があります。（この写真はここで撮影したものです。）工場のある建物も一階部分は津波によって被害を受けたことなど、その時の状況を詳しく話して下さいました。中でも津波が襲ってくる時の大きくて深くて暗くてまっ黒な色や音には今まで経験したことがないような恐怖を感じたそうです。＜アトリエ恵＞の名前の由来にもなっている恵子さんは今回の津波でご主人を亡くされ、一緒に働いている人達もそれぞれの大変な状況に今もなお悲しくて苦しい思いをしています。それでも彼女達はなんとか悲しみを乗り越えようと必死に頑張っています。

洋服はけっしてデザインの力だけではなく、裁断から縫製に至るまで彼女達の手のぬくもりや思いのこもった丁寧な仕事があってこそ一着のいい洋服が出来上がります。そしてその洋服を着る人にもそのぬくもりや思いが伝わるのだと私は信じています。

ネバーギブアップ！！

Edwina Hörl

あきらめない

「あきらめなさい」

早朝だった。どの通りにも猫の

子一匹いなかった。ぼくは、駅に向かって歩いていた。塔の時計と自分の時計を見くらべてみると、自分が考えていたよりずっと

遅いことがわかった。大急ぎで行かねばならなかったが、この発見に動搖したためか、道があやしくなった。この町の勝手がまだよく呑みこめていなかったのである。さいわい、近くにおまわりがいた。ぼくは、走っていって、息を切らしながら道をたずねた。おまわりは、にやりと笑った。『わたしから道を聞こうとおっしゃるのですか』『そうです』と、わたしは言った。『道がわからないのですから』『あきらめなさい。あきらめることですな』おまわりは、そう言いながら、いきなりくるりとむこうを向いた、ひとりで笑おうとする人のように。

Franz Kafka

人間が生きてゆくのに重要なことは何なのか:

日々の水や食物、または希望なのか、疑問に思うことがありました。もしかしたら先に満たされるのは体で、魂はその後なのかも知れません。

あらゆる天災や人災がもたらす悲劇による抑圧や過酷な状況、それに対する人々の無関心や諦めの気持ちを目の当たりにしてきましたが、私たちは前に進むべき力を与えてくれる希望のかけらを探し続け、きっと今日よりはましな明日やその続きがあると信じています。

今、日本が経験している大きな試練、地震、津波、更には原発事故という3重災難の3.11。絶望するのは簡単です。しかし東北の人達が破壊された生活を建て直すのを見るとき、または反原発デモのリズミカルなドラムを聞く時、日本の若い人々が日本を新しくしようと安全でサステナブルな未来を創ろうとする声を聞く限り、これは断念や無関心のメッセージではなく、明らかに希望そしてあきらめない心といった魂の叫びなのです。

Scott Ree, (Translation Hiroshi Hasegawa) Namida Project members /
for Edwina Hörl